

# 関西大学年史展の報告

福井智佳子

はじめに

年史資料編集室が企画・運営する四度目の展示である「関西大学年史展」は、平成十一年七月二十八日から常設的に展示が始まった。

前回まで展示場所として利用していた新関西大学会館北棟のアートギャラリーは、平成十一年二月、就職課資料室の移転のため閉鎖され、その展示設備は新関西大学会館の南棟・インフォメーションロビーへと移された。

年史資料編集室としては初の常設的な展示となる「関

西大学年史展」についての報告をまとめたい。

## 一 展示までの経過

アートギャラリーの設備がインフォメーションロビーに移ったことにより展示スペースの管理・運営は、新関西大学会館南棟の管理担当課である就職課が行うこととなった。そして、関係部署と協議した結果、当面は年史資料編集室が展示を行うが、他部署や学生のクラブなどから展示企画が出てきた場合には展示を入れ替えるということになった。



インフォメーションロビーがある新関西大学会館 南棟

他の企画が出てくるまで、とは言え、常設的で長期間の展示となることが予想されたため、年史資料室の展示としては初の、期間を区切らない常設的展示となった。

#### 企画展とのちがい

ここで、年史担当者として大きな課題となったのが、展示場の立地であった。大学の入り口に近いインフォメーションロビーのため、人の出入りが頻繁にある。扉にも近いため、外の空気が流れ込み、虫や湿気が容易に侵入してくるという環境だった。

しかし、こうした立地条件は改善の余地がないため、当初、原資料を展示することには、大きなためらいを感じ、代替のきくような資料、つまり写真や複写（コピー、レプリカ）資料に限定する方向で検討していた。

だが、これでは、見る人の興味をそそるような展示とは言えず、また資料の魅力も半減する。展示をする以上、見る人の知的好奇心を満たすものでなければ展示の意味がないため、担当者内で協議した結果、できるだけ原資

料を使った従来の展示にすることとした。

資料保全の観点から見れば、若干の不安材料もあったが、警備員が常駐しており、また、毎日清掃も行われることから、万一の事態が発生しても迅速に連絡してもらえると考えたため、原資料の出品を決定した。

本学の歴史をたどる企画は、すでに、第一次展示「関西大学創設期展—関西法律学校の創立（明治十九年）から大学昇格（大正十一年）まで—」と第二次展示「関西大学史展」を行っている。今回は、これらをベースにして圧縮した形となった。アートギャラリーからの施設の移動で、以前八個あったケースが六個になったという状況をふまえ、資料を選定していった。

企画展であれば、出品資料の中で、いわゆる「目玉」と言われるような演出も必要かもしれない。しかし、常設的な展示という性質を考え、オーソドックスな構成を心がけた。毎回の展示で、いつも心がけているが、「わかりやすく、簡潔に」という事を大原則とし、資料を厳密に等分することは難しいものの、展示のなかである時

期、ある人物だけが突出しないようにした。

#### 準備作業

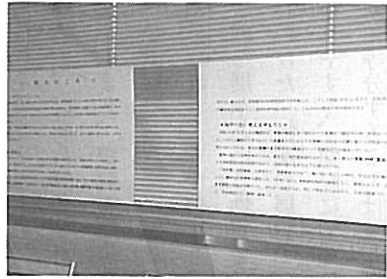
インフォメーションロビーでの作業は、前回のアートギャラリーでのそれとは、大きな違いはなかった。ただ、倉庫がないことと、ピクチャーレールがないなどの、物理的な相違はあったが、倉庫については、同じ建物にある学生課に協力してもらい一時使用させてもらった。また、ピクチャーレールの施設がないため、ケースに直接展示内容を説明したパネルボードを貼り付けて対応した。さらに第一、二次展示の時に使用したキャプションも、利用できるものがあればそれを使用した。

何から何まで手作りの展示で、手作業に時間を要した仕事ではあったが、パネルボードの使用は、何か変更点があれば、容易に作り変えることができるし、市販のものを使用するので安価であることなどを考えれば、小規模の展示ではかえってメリットが大きいと言えよう。なにより、担当者自身、自らが作り上げたという実感が得

られ、充実した期間だった。

## 二 オープン

展示は、平成十一年七月二十八日、受験生が多く参加する「サマーキャンパス」の日にあわせて開催された。当日は、インフォメーションロビーが各種行事の集合場所だったこともあり、目録を何度か補充しなければなら



展示パネルの取り付け状況



展示を見学するサマーキャンパスに参加した高校生たち（平成11年7月28日）

ないほどの盛況ぶりだった。その後も、学生や地域の方々の待ち合わせ場所として利用されているため、その時に何気なくケースをのぞいている人を数多く見かける。アートギャラリーでは、入ろうか入るまいか躊躇する学生の姿が見られたが、ロビーでは、「格式ばった展示」という雰囲気がない分、学生も近寄りやすいようである。気軽に本学の歴史に触れてもらえるという意味で、アートギャラリーとはまた違う良さが反映されていると感じた。

### 周囲の協力

展示ケースの管理、見回り、開閉、清掃については、現在も警備、清掃の方々の大きな協力をいただいている。また、当初、他の企画が出たときには展示品を撤去するという申し合わせだったが、就職課のはからいで、展示ケースの中はそのままだし、他の企画があれば、ケースの前に展示をするという方式がとられるようになった。このため、年史資料を動かすことがなく、担当者として

は、非常にありがたい措置だった。

夏期、冬期休業などの長期休暇期間における展示の取り扱いについては、原則として、そのまま継続させることとした。現在までの経過で特筆すべき問題も発生していないため、当面は休業期間でも展示を続ける意向である。また、展示替えについても、実施する見込みだが、時期等の詳細な計画は今後の課題となっている。

### 今後の課題

今回の展示で実感したことは、「平易」であることの難しさだった。常設的に資料を展示するということは、それだけ数多くの見学者の目に触れるということだろう。誰が見ても、本学の歴史がわかるような文章、レイアウトというのは、担当者が心がけなければならないことだが、年史担当者ゆえに、思い入れのあるエピソードでは展示構成に力が入ってしまったり、担当者にとっては当然周知している史実ゆえに簡潔になりすぎて、初めて本学を訪れる人にとっては、説明が不足した展示内容になっ



年史展全景

は意外な箇所で見問が入り、改めて「わかりやすい展示」をめざすには、高い技術が必要なのだと痛感した。

広がる情報―視覚情報としての年史展示

他大学や他の展示を見学して、見習わなければならぬ

たりしてしま  
う。これを避  
けるため、で  
きるだけ多く  
の人に説明原  
稿を読んでも  
らい、率直な  
意見を聞いた  
りした。こう  
して原稿に何  
度かの訂正を  
加えたのだが、  
担当者として  
いと感するのが、視覚展示とも言えるような、視覚情報重視の展示方法である。キャプションの説明文ひとつを見ても、読んで理解してもらおうというより、見て理解してもらおう形式になっている。こうして展示がシンプルになるぶん、写真資料を多用し、見る人の感性に訴えながら、史実の要点を押さえることが必要となってくるだろう。

今回も、このような形式をめざして試行錯誤を繰り返したのだが、まだ、完全なものとは言いがたいように思う。また、写真資料についてもさらに積極的に「埋もれている」写真の発掘・活用をすすめていきたい。

深まる情報―史実としての年史資料

視覚重視の展示が広がる中で、他方、資料から歴史的な情報を読み取るための展示方法も重要であることは言うまでもない。たとえば博物館や美術館等で見られるように、資料の下に鏡を置き、底面にある文様や印も見学できるように配慮することで、一元的な展示から、さらに

前進した展示を構成できる。

年史資料にあてはめてみれば、たとえばアルバムや冊子などは一元的な展示になりやすいが、見学者としては、やはり次のページが見たいという気持ちになるだろう。それならば、その資料を複写してコピーの冊子を作成すれば、その希望に対応できるし、資料の公開という意義も深めることができる。

今回の展示ではそれを実施するような資料はなかったが、今後、展示品に合わせて対応していきたいと考えている。

### おわりに

今回の展示では、見に来られた方の芳名録を置いていない。常設的な展示なのだから、わざわざ名前を記入してもらうことはないし、何よりも目に触れることの方が大切だと思ったからだ。

だが、他大学の展示などを見学していると、芳名録や

アンケートを実施しているところも多く、前の考えを訂正しなくてはならないと感じた。

芳名録は単に見学者数の参考にしたり、名前を記入してもらうためのものではなく、見学者と担当者をつなぐ一つの窓口である。アンケートも同様であろう。展示を見て感じたことを、展示担当者に伝えたいというのは、ごく自然な感情だが、そのことに気がついたのが、自身が見学者の立場になったときであった。

見学者の視点になるように努めていたつもりでも、実際には完全には出来ていない。見学者の立場になるということの難しさを感じる。

展示は展示環境を含めた全体に細やかな気配りが必要である。その点を留意して準備しているつもりでも、細部まで完璧には配慮できていない。反省はつきないが、常設的な展示なのだから臨機応変に改善し、多くの見学者が、それぞれ何かを感じるような展示にしていけたらと考えている。

学生が在学する期間は通常四年である。その間にどれ

だけ本学の歴史を知ることができるのか、やはり「年史」のアプローチで大きく変わるのだろうか。自分自身がいた時間だけの断片的な関西大学だけではなく、百十四年前から存在し続けているということを知ってもらうことで、学生ひとりひとりの関西大学像を持つてもらえれば、それこそが年史担当者の最終的な目標だと感じている。

(ふくいちかこ・出版部出版課主事)

## 資料

- 一、「関西大学年史展」目録内容
- 二、「関西大学年史展」ケース説明文

### 資料一、「関西大学年史展」目録内容

関西大学は明治十九年十一月四日の関西法律学校創立以来、すでに百十三年を迎え、日本でも有数の歴史と伝統を誇る私立大学になっています。本学ではすでに『関西大学百年史』をはじめとする年史が編纂され、本学の歴史については誰でも容易に知ることができますが、今回、インフォメーションロビーにおいて、関西大学のあゆみについて展示を十九年に関西法律学校が創立されたから、大正十一年に千里山キャンパスの開設を経て、平成六年の高槻キャンパスの誕生、そして現在までの資料をケースに展示して本学の歩みをたどっています。

### 展示目録

〔第一ケース〕創立のころ

- ・創立者群像のレリーフ〔写真〕
- ・ポアソナード レリーフ像
- ・小倉久愛用の筆置きと筆洗い



- ・小倉久愛用のペン立てとペーパーナイフ
- ・借用証（初代校長小倉久・校主吉田一士の依頼により土居通夫が創立資金の一部として百円を融通したものの）〔写真〕

- ・第一回卒業生〔写真〕

- ・第一回卒業生津島（内田）重成の卒業証書（講師全員が署名捺印している）

- ・筆記具（矢立と墨壺。第一回卒業生津島（内田）重成が愛用したもの）

- ・関西法律学校の広告〔写真〕

〔第二ケース〕明治・大正期へ大学昇格のころへ

- ・福島学舎〔写真〕

- ・福島学舎での授業風景〔写真〕

- ・土地売買書（明治三十九年十一月十五日付、福島校地の土地を大阪生命保険株式会社から購入したもの）

- ・建物所有権保存登記申請書（明治三十九年十一月十五日付、福島校舎の建物所有権保存登記に伴う申請書）

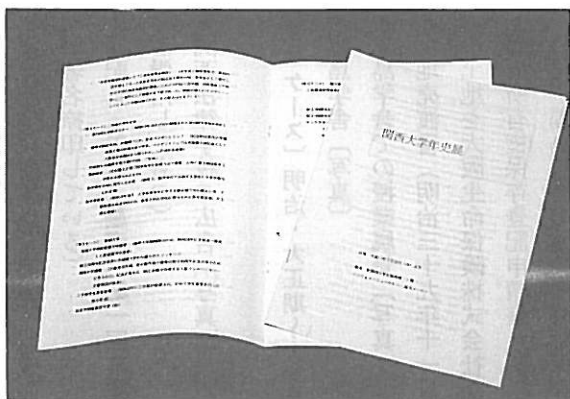
- ・大学設立認可申請書（大正十年二月、文部省に提出した大学設立認可申請書。申請したのは法学部と商学部の二学部）

- ・創刊当初の『千里山学報』（昇格十日後の大正十一年六月十五日から発行されはじめた『千里山学報』。教職員や学生の研究・文芸発表の場としてだけでなく、校友相互が連絡を取り合う機関誌としての役割も果たした。昭和四年、天六学舎の新築を契機に『関西大学学報』と改称）

〔第三ケース〕旧制大学へ昭和初期までへ

- ・千里山学舎構内要図（昭和二年）大正十一年の大学昇格後も千里山学舎の整備は続き、大正十五年には大運動場とクラブハウス、昭和二年には大学本館および学部学舎が完成した。現在は、この大運動場の南半分に総合図書館が建ち、大学本館と学部学舎のあった場所は法文学舎になっている）

- ・来学者芳名録に記された犬養毅（木堂）の墨跡（犬養



年史展目録

毅は大正十二年四月二十九

日、「学の実

化」講座の講

師として本学

に来学し、「確

固不動の信念

を樹立せよ」

という講演を

行った。この

時、通信大臣

であった犬養

は、来学者芳

名録に「無所

に五・一五事件で暗殺された

畏（畏れる所なし）」と記した。その九年後、昭和七年

・関西大学門標（昭和四年に竣工した天六学舎に掲げられていたもの）

・「背光」（創立五十周年記念特集号）と原稿スクラップブック

（学友会新聞部が発行した『関西大学新聞』の創立五十周年記念特集号。スクラップブックは掲載記事の直筆原稿を収めたもので、編集スタッフだった岡田実之氏が保存していた）

・創立五十周年記念絵はがき（創立五十周年を記念して発行された絵はがき。それぞれに記念のスタンプが押されている。二枚一組の絵は鳥海青児画伯が東洋最古の世界地図「坤輿全圖」をモチーフに描いたもの）

・「指定金銭信託證書」と「三百年後資金碑誌」（本学第一回卒業生で、最初の法学博士となった武田宣英氏が創立五十周年の時、奨学金として寄付した三千元の指定金銭信託證書。この三千元は三百年間、信託預金して利殖し、一億円として寄贈する予定であった。戦後の激しいインフレーションによって価値は減じたが、その厚志は生きている）

〔第四ケース〕 学生生活の変遷

- ・竹田繁七の優勝を祝う提灯行列（写真）
- ・優勝銀杯（竹田繁七が第十七回東海学生相撲大会で優勝した時に第三師団長井上中将から贈られたもの）
- ・野球部第一次ハワイ遠征ポスター（野球部は昭和八年と昭和十一年にハワイへ遠征している。このポスターは第一次遠征のもの。選手たちは六月二十五日から七月十六日まで十三戦し、九勝四敗の戦績を残した）
- ・第十回大学祭ポスター（昭和十年十月十七日に開催された第十回大学祭のポスター）
- ・メダル、襟章（文芸部、新聞部、学友会幹事）、ベルトバックル（左側二個のメダルは「第二十二回全国大学高専弁論大会」（昭和十一年）と「時局批判大演説会」（昭和十二年）で受賞したもの。富塚豊氏寄贈）
- ・大島謙吉のロサンゼルス・オリンピックク三段跳び（写真）（昭和七年、ロサンゼルスで開催された第十回オリンピックには、跳躍の大島と槍投げの長尾三郎が出場した。大島は三位に入賞。本学初のメダリストとな

った）

- ・勤労奉仕の時に貸与した水筒（戦時下、勤労奉仕で出勤する学生に大学が貸与した水筒）
- ・仮卒業証書（昭和十八年十月、大学高専学生に対する徴兵猶予令の廃止に伴って臨時徴兵検査が行われ、徴集された学生に授与された仮卒業証書。井上清氏寄贈）

・戦地からの便り（『関西大学学報』は教職員・学生だけでなく、校友にも配布された。そのため、大学学報局へは出兵した校友たちの近況報告を兼ねた礼状が戦地から数多く届いた。神屋敷民蔵氏寄贈）

〔第五ケース〕 新制大学と戦後復興から

昭和四十年代まで

- ・短期大学部設置認可申請書（短期大学部開設のため、昭和二十四年に文部省へ提出した設置認可申請書）
- ・創立七十周年記念式典に外国諸大学から贈られたメッセージ

・ 関西大学讃歌〔複写〕（北條秀司作詞、清水脩作曲の讃歌は創立八十周年記念式典のために作られた。記念式典当日、朝比奈隆が指揮する大阪フィルハーモニー交響楽団が演奏）

・ 工学部学生募集要項（昭和三十三年に工学部が設置され、初めて学生募集を行った際の要項）

・ 社会学部設置認可書〔複写〕

〔第六ケース〕 関大新時代く第二世紀の幕開けく

・ 上田繁潔前理事長揮毫「二十一世紀への飛翔」（第二期理事長。平成七年に揮毫されたこの言葉は、大学映画の題名にもなり、タイトルバックとしても使用された）

・ 創立百周年記念事業『祇園精舎』発掘風景〔写真〕

・ 『祇園精舎跡』から出土した土器〔複製〕

・ 創立百周年記念式典〔写真〕

・ キャラクターのデッサン画（創立百周年を記念してシンボルマークと、関西大学を象徴するマスコットのキ

ャクターを制定することになり、昭和五十九年六月、学園関係者から創作作品を公募した。二百七点の応募があり、その中から池永一広氏がデザインしたシンボルマークと、北村洋氏がデザインしたキャラクターがそれぞれ一席に決まった。北村氏による「作者のことば」は次のとおり）

大学―学問―知恵ふくろをもじって「ふくろろ」を戯画化してみました。「ふくろろ」はローマ神話やギリシャ神話で学問・技芸・知恵などを司る女神の使者とされた聖鳥で、古くから知恵の象徴といわれています。その透きとおるような理知的な大きな目と知識や情報を的確にとらえる確かな耳に因んで、若人のみずみずしい目と耳で自分の生き方、身の回りのものを見つめなおし、肌で感じ、豊かな創造力を学んでいただきたいものです。

・ 高槻キャンパス〔写真〕

・ 総合情報学部設置認可書〔複写〕

以上

資料二、「関西大学年史展」ケース説明文

第一ケース「創立のころ」

\*新しい時代をめざして\*

明治維新を経て、長い鎖国の夢からさめた日本人は、欧米諸国に比べて自国の文明の甚だしい立ち遅れを知った。明治政府は近代国家の建設に懸命の努力を傾けた。国会開設を待望する自由民権運動や、諸外国との不平等条約を解消する条約改正が国家的な課題となるなか、わが国の司法制度はフランスを手本に進められた。

明治六年、司法卿江藤新平に招かれて来日したギユスタブ・エミール・ボアソナード・ド・フォンタラビーは、法典編纂の傍ら司法省法学校の教壇に立ち、司法官の育成に尽力した。彼から薫陶を受けたのが、本学の創立者たちである。

\*創立前夜\*

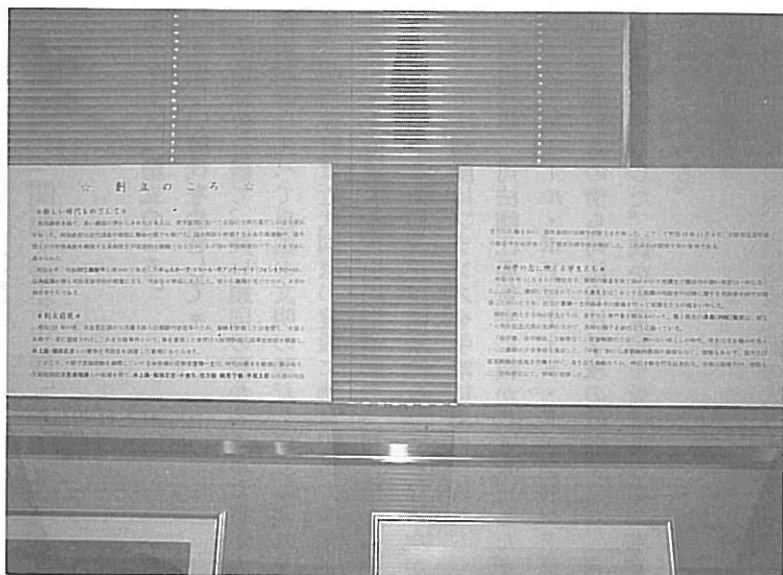
明治十八年の末、自由党左派の大井憲太郎らは朝鮮内

政改革のため、渡韓を計画したが発覚し、大阪と長崎で一斉に逮捕された。これを大阪事件という。事を重視した政府は大阪控訴院に国事犯法廷を開設し、井上操・堀田正忠らの優秀な司法官を派遣して審理にあたらせた。

このころ、大阪で言論活動を展開していた自由民権の活動家吉田一士は、時代の要求を敏感に読み取り、大阪控訴院長児島惟謙らの後援を得て、井上操・堀田正忠・小倉久・志方鍛・鶴見守義・手塚太郎らの若い司法官たちに働きかけ、関西最初の法律学校設立を計画した。こうして明治十九年十一月四日、大阪西区京町堀の願宗寺を仮校舎として関西法律学校が開校した。これがわが関西大学の発祥である。

\*向学の念に燃える学生たち\*

明治十九年十一月四日の開校当日、新聞の報道を見て詰めかけた受講生で願宗寺の狭い本堂は一杯になった。しかし、講師に予定されていた小倉久をはじめとする現職の司法官の出講に関する司法省の許可が到着しなかつたため、校主の吉田一士が経済学の講義を行って受講生



取り付けられたケース説明文パネル

たちの渴をいやした。

勉学に燃える当時の学生たちは、昼夜なく専門書を読みつけた。第一期生の津島（内田）重成は、創立七十年記念式典の祝辞のなかで、当時の様子を次のように語っている。

「法学書、法学雑誌、文献等なく、原書解読の力なく、無いに尽くしの時代、学生は耳を働かせ禹々として講師の片言隻語も筆記した。（中略）別に心身訓練の特別の施設もなく、課程もあらず、諸先生は質実剛健の気風を作興すべく、身を以て垂範せられ、時に寸鉄を打ち込まれた。生徒は勤儉力行、夜眠も三、四時間位にて、無暗に勉強した。」

第二ケース「明治・大正期〈大学昇格まで〉」

\* 学舎の移転 \*

明治十九年十一月四日に願宗寺で呱呱の声をあげた本校は、順調に発展を遂げ、明治三十四年には名称を「私立関西法律学校」とし、二年後の明治三十六年、専門学

校令による学校として認可を受けた。明治三十八年には「私立関西大学」と変更し、現在の経済学部、商学部のもととなる学科も次々と誕生した。

増加する学生たちに合わせて、興正寺、江戸堀学舎、天王寺美術館仮校舎と校地を移し、明治三十九年に福島学舎へ移転した。

#### \* 専門学校から大学へ \*

大学の名を冠しているとはいえ、専門学校としての扱いだっただけの本学にとって、帝国大学と同等の資格を持つ「大学（旧制）」への昇格は大きな夢であった。そうしたなか、大正七年十二月六日、ついに大学令が公布された。この時期、東京では準備を完了した私立大学の申請手続きが相つぎ、慶応大学、早稲田大学、政法大学、明治大学、国学院大学、中央大学、日本大学、関西では同志社大学などがいち早く昇格の認可を得ていた。

#### \* 大学昇格への道のり \*

大学令に準拠するには福島学舎より広大な校地と充実した教育施設を設けなければならない。本学も大学昇格

に備え、大学令公布前からあらゆる施設の整備と拡充につとめてきた。本学拡張委員会は、大正九年四月に大阪府三島郡千里村の土地を入手し、大学昇格の地を定めた。現在の千里山キャンパスの誕生である。

しかし、本学は資金面で大学昇格にはほど遠い状態だった。そのため、柿崎欽吾理事は、年来の親友であり、大阪経済界の巨頭、大阪商業会議所会頭・山岡順太郎の出馬を促した。その結果、募金活動は軌道にのり、大正十一年六月五日、本学はついに大学昇格の悲願を達成した。新たに設置されたのは法と商の二学部であった。以後、本学は千里山キャンパスを中心に大きく発展していく。

#### 第三ケース「旧制大学」昭和初期まで \*

#### \* 大正デモクラシーのなかで \*

大学昇格に尽力した山岡順太郎は、学長兼総理事となり、新しい大学の指導理念として「学の実化」を唱えた。学問と実際の調和を説くこの理念は、本学の学風として

定着した。

「大学の社会化」をめざし、大学の講義では得られない実際の知識を取り入れることに目的を置いた「学の実化」講座には、国内外を問わず、さまざまな分野の第一線で活躍する著名な人々が多数、講師として招かれた。講座は大正十一年五月から昭和二年十一月まで三十三回にわたって開催された。

また、この「学の実化」講座以外にも大学のエクステンションとして、学外の社会人を対象にした語学講習会や日曜自由講座などが開かれた。これらの講座には女性が多く参加、聴講したことから、新時代を語るものとして注目された。

#### \*天六キャンパスの誕生\*

大正十四年、鉄道省は東海道本線を拡幅、高架化するため、福島学舎の敷地を収用する方針を決めた。本学は東淀川区北長柄町に校地を購入し、新しく天六学舎を建築することにした。学舎は昭和四年九月に竣工し、専門部、関西甲種商業、第二商業がここへ移転した。またこ

れに伴い、それまで夜間のみであった専門部に昼間部(第一部)が開設された。

#### \*創立五十周年を迎えて\*

大学の拠点を千里山と天六学舎に移し、昭和九年四月、初めて学部長制度が発足した。また、同年十月には『関西大学研究論集』が創刊され、教学面もとみに充実してきた。

そして、昭和十一年五月二日、創立五十周年記念式典が挙行された。記念式典をはじめとして祝宴や記念講演会、校友祝賀会、『創立五十年史』や『記念論文集』の刊行、米式蹴球・ホッケー・ラグビー・拳法・柔道・馬術・弓道などの模範競技、学術展を主体とした展覧会などの催しが繰り広げられた。

だが、こうした華やかな行事の中にも「教学刷新の急務」を説く仁保亀松学長の記念講演には、非常時の圧力が加わって、やがて来る学園の方向転換が暗示されていた。



#### 第四ケース「学生生活の変遷」

##### \*大正時代の学生生活\*

学生生活が活発化するにつれ、学生たちは千里山の豊かな自然を舞台に自由を謳歌した。大正時代のヒューマニズムの風潮のもと、文学部では音楽・弁論・雑誌・文芸・演劇といったクラブが活発な活動を始めるとともに、英語会や千里山短歌会、絵画芸術部、広告研究会などの同好会も結成された。

大正十五年十月二十三日・二十四日には大運動場の完成とあわせて、わが国では前例のない大学祭が举行され、多数の観客を集めた。この大学祭はその後も毎年開かれ、大阪名物の一つとなった。

##### \*花ひろくスポーツ関大\*

スポーツの面でも大きく花が開いた。相撲部は大正十年の第三回全国学生相撲大会で福井清吉選手が、また、大正十二年の第五回大会で竹田繁七選手が個人優勝し、それぞれ第三代と第五代の学生横綱となった。翌大正十三年の第六回大会では団体優勝も遂げている。

さらに、このころから本学の選手たちは国際試合にも出場するようになった。陸上部の大島鎌吉（三段跳び）

・長尾三郎（槍投げ）両選手が昭和七年の第十回ロサンゼルスオリンピックに出場し、大島が銅メダルを獲得して金メダルの南部忠平（早稲田大学）とともに日章旗をかかげた。

野球部は昭和五年にアメリカ遠征を行い、十戦六勝四敗の成績を残したあと、昭和七年には本田竹蔵、西村幸生両投手を擁して全国制覇を果たした。さらに昭和八年と十一年にはハワイ遠征を行い、十三戦九勝四敗ならびに二十二戦二十勝二敗の好成績を残して「関西大学野球部」の実力を印象づけた。

##### \*忍び寄る軍靴のひびき\*

しかし、世間では軍靴のひびきが日増しに高くなり、大学にも戦争の影を落としていった。

本学では、すでに大正十五年以来、軍事教官としての配属将校を受け入れていたが、昭和六年ごろからは軍事教練が一層強化された。昭和十四年九月、第二次世界大

戦の開戦によつて軍事教練はより強化され、自由な研究や教育にも次第に厳しい制限が加えられるようになった。また、日本文化講義が各大学で行われるようになり、大東亜共栄圏などの超国家思想が説かれた。

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が始まると、大学の修業年限は三年から二年九カ月に短縮され、昭和十七年からは二年六カ月に縮められた。さらに昭和十八年十月には大学高専学生に対する徴兵猶予令が廃止され、同年十二月には学徒出陣で軍隊に入営、学業半ばで銃をとらなければならなくなった。その他の学生も勤労奉仕で軍需工場に動員された。

さらに軍は私立大学の文科系の統合を企てた。私立大学の生き残る道は理工系を設置する以外になく、本学も昭和十九年四月に一般機械、船用機械、航空機械の三専攻科からなる関西工業専門学校を天六学舎に設置した。こうして学徒出陣と学生定員的大幅削減という二重の打撃を受けて学問の場としての色彩を失った千里山学舎には中部軍の通信部隊が駐留してきた。

第五ケース「新制大学と戦後復興から昭和四十年代まで」

\*新しい時代へ\*

昭和二十年八月十五日、戦争は日本の無条件降伏で終わった。大阪の市街地は大半が焼野原となり、本学も天六学舎の学生控所を昭和二十年六月七日の空襲で消失した。また、千里山の子科校舎外壁には米軍艦載機による機銃掃射の弾痕が生々しく残った。しかし、平和回復の喜びは大きく、学生の中には九月十日の授業再開の日に元氣よくキャッチボールを始める者もいたという。

昭和二十一年四月から男女共学を実施し、その結果、法学部（旧制）に女子学生が一人入学してきた。戦前にも女子の聴講生はいたが、正規の女子学生としてはこの時が初めてであった。その後、女子の入学は次第に増え、学園にはそれまでにない華やかな空気が漂うようになった。

\*関大ルネッサンス\*

昭和二十二年五月、本学卒業生としては最初の学長・岩崎卯一（一八九一〜一九六〇）が選出された。岩崎は

「学生に告ぐ」と題し、次のように述べた。「われらの  
関西大学は、いま文化的ルネッサンスのあけぼのを迎え  
んとしている。その中核は何ものであるか。これは関大  
の長き伝統のなかに秘められた「真理究明」の真諦を新  
たに発見することである。……真理の探究にのみ全生命  
を賭して悔いざる我等学徒はいかなる権力の苔にも、あ  
えて闘争する熱意と勇気とを把握せねばならぬ。これの  
みが関大の誇りであり、学風であらねばならぬ。」

この「関大ルネッサンス」の提言は、戦争で荒廃した  
大学の再建をのぞみ、勉学の復興に熱意を燃やす学生の  
喝采を博し、学生たちは、いたるところで「関大ルネッ  
サンス」を高唱した。

**\*新制大学としての出発\***

昭和二十三年四月、本学は全国の大学に先駆けて新制  
大学（第一部・第二部とも法・文・経済・商の四学部）  
に転換した。さらに学校教育法の改正に伴い、昭和二十  
五年四月から短期大学制度が発足したのにあわせて、本  
学でも工業経営と商業経営の二学科からなる短期大学部

を設置した。

**\*七十周年記念式典と工学部の開設\***

新制大学に転換後、学生数の増加はめざましく、理事  
会は昭和二十五年から、学内の建物を充実させる施設拡  
充五カ年計画に着手した。昭和三十年十一月四日、新築  
間もない第一学舎大講堂で創立七十周年記念式典が挙行  
された。

昭和三十三年には機械、電気、化学、金属の四学科か  
らなる工学部を設置した。昭和三十年ごろからオートメ  
ーションによる技術革新が進み、コンピュータの導入な  
どによって科学技術が飛躍的に発展した結果、各方面か  
ら技術者の養成が望まれたからである。工学部の開設に  
より本学は理工系学部を合わせもつ総合大学となり、質  
的にも一段と充実することになった。

**\*八十周年記念式典\***

昭和四十年、創立八十周年記念式典が挙行された。記  
念事業では、図書館や体育館、研究室などを新・増築す  
ることが決定し、その準備が進められた。

その他の記念事業として、本学初の海外学術調査が企画され、ペルー・アンデス学術調査隊が派遣された。また、「関西大学讃歌」「新学生歌」が制定された。「関西大学讃歌」は校友で劇作家の北条秀司が作詞を担当した。

#### \* 社会学部の開設\*

さらに情報科学時代に対応する新しい学部として社会学部の設置が強く望まれるようになり、昭和四十二年一月二十三日付で設置の認可を受けた。本学六番目の学部として誕生した社会学部は社会学専攻、マス・コミュニケーション学専攻、産業社会学専攻の三つで構成された。その後、昭和四十八年四月に産業心理学専攻が新設されて四専攻となった。

#### 第六ケース「関大新時代」第二世紀の幕開け

##### \* 創立百周年記念式典\*

本学の創立百周年を祝う記念式典は昭和六十一年十一月二日、大阪城ホールで挙行された。澄みきつた秋天のもと、祝福のために遠く北海道や沖縄、さらに韓国、台

湾からも来賓、校友ならびにその家族らが多数参集し、その数は実に一万三千人にのぼった。記念式典は定刻の午後一時に開式された。

久井忠雄理事長の式辞、大西昭男学長の挨拶に続いて、来賓の矢口洪一最高裁判所長官、石川忠雄日本私立大学団体連合会会長（慶応義塾塾長、大学設置審議会会長）、岸昌大阪府知事、榎本信雄校友会会長四氏による祝辞が述べられ、さらに「関西大学讃歌」が演奏・合唱された。満場の聴衆はその荘厳なハーモニーに聞き入った。こうして一時間二十分にわたる式典は「世紀の祭典」と呼ぶにふさわしく、厳粛に執り行われ、滞りなく終わった。

また、記念式典以外にも百周年記念会館やセミナーハウス・高岳館の建設、研究・教育振興基金の設定、記念刊行物の出版、記念映画の製作、「内藤文庫」の設置、日・印共同学術調査（祇園精舎跡の発掘）などの記念行事も実行に移された。

##### \* 総合情報学部の開設\*

創立百周年記念式典を終えて第二世紀に突入した本学

は、新たな施策を次々と実現していった。その一つが、幅広い視野をもって情報の操作・発信が自由にできる「情報ジェネラリスト」の育成を主眼に置いた総合情報学部を設置である。政治・経済・社会・文化など、あらゆる領域の問題を「情報」という視点から解明・探究し、情報・メディア・コンピュータの理論的知識ならびにコンピュータ・リテラシーやメディア・リテラシーを身につける総合情報学部は平成六年四月、本学七番目の学部としてスタートした。平成十年には「情報スペシャリスト」の養成に主眼を置く大学院総合情報研究科も開設された。